

Title	ベトナムバクニン省出土仁壽舍利塔銘、及びその石函について
Author(s)	河上, 麻由子
Citation	東方學報 (2013), 88: 462-443
Issue Date	2013-12-20
URL	<a href="http://dx.doi.org/10.14989/180560">http://dx.doi.org/10.14989/180560</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

## ベトナムバクニン省出土仁壽舍利塔銘, 及びその石函について

河 上 麻由子

### は じ め に

2004 年、ハノイ東部のBắc Ninh 省 Thuận Thành 縣 Trí Quả社 Xuân Quan 集落の Xuân Quan 寺の裏手で、碑銘と石函が発見された<sup>1)</sup>。レンガ作成のための粘土を採掘していたところ、粘土層の上、地下 2.5 m ほどの位置から発見されたという。當寺は、交趾郡の郡治とされる Luy Lâu 城から約 800 m 離れた平野部に位置し<sup>2)</sup>、付近にはベトナム佛教初傳の地という傳承をもつ Dâu 寺がある。

碑銘は蓋を伴っており、出土時、両者はニワカのようなもので接着されていた。発見者のNguyễn Văn Đức 氏がショベルカーを用いて引き剥がしたところ、蓋の表面が一部破損した。両者を分離させた後、蓋の裏面、銘の表面を確認したが、水を含むいかなる物質も付着していなかったらしい。石函には蓋があり、内側には黒ずんだ物質以外は何物も確認できなかったという。また、碑銘・蓋、石函・蓋のほかに、それらを載せた板状の石（本稿では、バクニン省博物館の報告に従って「石板」と呼ぶ）も出土した（写真 1）。Nguyễn 氏は、碑銘と蓋、及び石函の蓋を自宅に持ち帰り、石函と石板は Xuân Quan 寺に送り届けた。その後 8 年間、碑銘と二つの蓋、石函と石板は、別所で保管されることとなる。

2012 年に入り、バクニン省博物館の研究収集室がこれら出土物の存在を知り、状態などを博物館に報告した。8 月 8 日には、保存と研究推進のため、Nguyễn 氏が碑銘・蓋と

- 
- 1) 舍利塔銘・石函の出土・移管・サイズに関わる情報は、ベトナム考古學會（2012 年 9 月）における Lê Việt Nga 氏の報告ペーパー（「Về hai cổ vật niên đại thời Tùy tại Bảo tàng tỉnh Bắc Ninh」）、及び 2013 年 5 月 23 日の筆者の調査に基づく。
  - 2) 櫻井由躬雄「雒田問題の整理 —— 古代紅河デルタ開拓試論 ——」（『東南アジア研究』17-1, 1979 年）18～19 頁。

ベトナムバクニン省出土仁壽舍利塔銘，及びその石函について



写真 1

石函の蓋（石函の身と石板は30日に寺院が寄贈）を博物館に寄贈する。博物館は、碑銘と石函の歴史的意義を確認した後、ハノイ國家大學教授である Phan Huy Lê 氏らに連絡、同月30日に同氏らが碑銘と二つの蓋を参観した。別件の調査でハノイを訪れていた筆者は、博物館館長である Lê Việt Nga 氏のご好意のもと、共同研究者である Phạm Lê Huy 氏の配慮もあって参観に同行することを許可された。

本稿は、2012年8月における調査と、博物館の協力により実現した2013年5月24日の再調査の成果を踏まえ、碑銘・石函についての基礎情報を紹介するとともに、特に石函に着目することで佛教の地域化に関わる情報の提供を試みるものである。

## 第一節 出土舍利塔銘・石函・石板の形状

### 1 「舍利塔銘」について

碑銘は、幅と奥行きは45 cm×46 cmで厚さは9 cm、蓋は、碑銘と同サイズで厚さは4 cmである。青みがかった石を用いるが、石質の分析は行われていない。碑銘と蓋とは、発見時、接着された状態で、石函の横に並べて置かれていたという。

銘文は1行13字で、13行にわたって記される。文面は以下の通り。

舍利塔銘

維大隋仁壽元年歲次辛酉十月

辛亥朔十五日乙丑

皇帝普爲一切法界幽顯生靈謹

於交州龍編縣禪衆寺奉安舍利

敬造靈塔願

太祖武元皇帝元明皇后皇帝皇

后皇太子諸王子孫等并内外羣  
官爰及民庶六道三塗人非人等  
生生世世值佛聞法永離苦空同  
昇妙果  
敕使大德慧雅法師吏部羽騎尉  
姜徽送舍利於此起塔

周知の通り文帝は、仁壽元年  
(601)、自らの誕生日に 30 州を選  
んで舍利塔を建立した。その後、  
仁壽二年、四年と舍利塔は建立さ  
れるが、舍利塔建立事業について  
の詳細を記録する「舍利感應記」  
(『廣弘明集』卷 17 所載) には、仁  
壽元年のこととして、

交州於禪衆寺起塔。(『大正新修大藏經』卷 52, 216 頁 b 10)

交州は禪衆寺に塔を起こす。

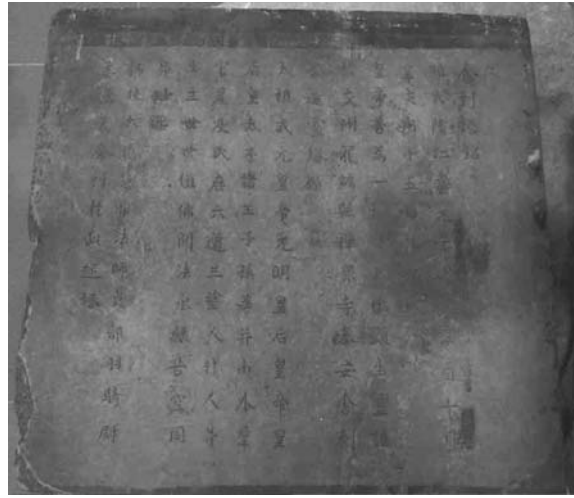
とある。よって今回発見された「舍利塔銘」は、文帝による仁壽元年の舍利塔建立事業  
において、交州禪衆寺塔に舍利を安置する際に作成されたものであることがわかる<sup>3)</sup>。

仁壽元年の舍利塔銘は、この他、青州勝福寺・岐州鳳泉寺・京兆龍池寺・同州大興國  
寺・雍州仙遊寺のものが知られる<sup>4)</sup>。これらの銘文はいずれも大同小異であることから、  
中村伸夫氏は、仁壽元年に全国各地 30 か所で作られた銘文は、恐らく、地名・寺名を除  
きはほぼ同一だったのであろうとした<sup>5)</sup>。

今試みに、青州勝福寺舍利塔銘と交州禪衆寺舍利塔銘とを比較してみる<sup>6)</sup>。

舍利塔下銘

維大隋仁壽元年歲次辛酉十



寫真 2 (舍利塔銘)

- 3) Phạm Lê Huy, “Nhân Thọ xá lợi tháp và văn bia tháp xá lợi mới phát hiện tại Bắc Ninh” *Tạp chí Khảo cổ học*, 181, 2013.
- 4) 舍利塔建立事業で作成された舍利塔銘のうち、實物や拓本が確認されているものは、大島幸代・萬納恵介「隋仁壽舍利塔研究序説」(『奈良美術研究』12, 2012 年) 106~113 頁に網羅されている。
- 5) 中村伸夫「仁壽舍利塔銘に關する一考察——羅振玉舊藏〈大隋皇帝梓州舍利塔銘〉をめぐって——」(『藝術研究報』25, 2004 年) 44 頁。
- 6) 青州舍利塔下銘については、李森「青州隋仁壽元年《舍利塔下銘》石刻考鑑」(『北方文物』2005 年第 2 期) が詳しい。

ベトナムバクニン省出土仁壽舍利塔銘，及びその石函について

月辛亥朔十五日乙丑

皇帝普爲一切法界幽顯生靈

謹於青州逢山縣勝福寺奉安

舍利敬造靈塔願 太祖武元

皇帝元明皇后皇帝皇后皇太

子諸王子孫等并内外群官爰

及民庶六道三塗人非人等生

生世世值佛聞法永離苦空同

升妙果

敕使大德僧智能 長史邢祖俊

侍者曇習 司馬李信則 孟弼書

侍者善才 錄事參軍丘文安

敕使羽騎尉李德謨 司功參軍李佺

地名・寺名・人名や異體字を除けば，①交州禪衆寺舍利塔銘では冒頭が「舍利塔銘」となっているのに對し，青州勝福寺舍利塔銘は「舍利塔下銘」となっていること<sup>7)</sup>，②交州禪衆寺舍利塔銘が太祖武元皇帝の前で改行するのに對し，青州勝福寺舍利塔銘は缺字一字を設けること<sup>8)</sup>，③交州禪衆寺舍利塔銘は12・13行目に敕使僧（慧雅）と散官（姜徽）とを記すのに對し<sup>9)</sup>，青州勝福寺舍利塔銘では12・13行目に敕使僧・長史・侍者以下の名を列記するという點以外は，兩者は同文である<sup>10)</sup>。交州禪衆寺舍利塔銘により中村氏の説の妥當性が強化されたのみならず，銘文の同一性が，青州・岐州・京兆・同州・雍州といった華北地域に加え，交州においても保持されていたことが確實になったといえる。

## 2 石函について

前項では，仁壽元年の舍利塔銘には，全國的にほぼ同じ文章が刻まれていたようであ

---

7) 仁壽元年の舍利塔銘の中で「舍利塔下銘」という書き出しを持つのは青州勝福寺・雍州仙遊寺のもの，「舍利塔銘」という書き出しを持つのは交州禪衆寺のものがある。京兆龍池寺の舍利塔銘は「舍利塔記」。岐州鳳泉寺の舍利塔銘は最終行に「舍利塔下銘」と書く。

8) 岐州鳳泉寺・雍州仙遊寺・同州大興國寺の舍利塔銘は，交州禪衆寺舍利塔銘と同一箇所改行する。京兆龍池寺の舍利塔銘には改行も缺字もみられない。

9) 交州禪衆寺に派遣された慧雅・姜徽について，関連史料は見出せていない。

10) 岐州鳳泉寺・京兆龍池寺・同州大興國寺・雍州仙遊寺の舍利塔銘には，敕使となった僧侶の名稱は記されない。舍利塔建立に関わった人名を記載するか否か，またどの範囲で記載するかは諸州の判断に任されたのであろう。

ることを紹介した。しかし、仁壽舍利塔において畫一性が要求されたのは舍利塔銘には止まらなるとされる。小杉一雄氏は、舍利塔建立を命じた文帝の詔をもとに、文帝は、諸州に同一の儀式を舉行させた後、同一の「造樣」（傍線部）に基づく畫一的な舍利塔の建立を企圖したとみた<sup>11)</sup>。以下、文帝の詔を「舍利感應記」から引用しておく。

門下。仰惟、正覺大慈大悲、救護群生、津梁庶品。朕、歸依三寶、重興聖教。思與四海之內一切人民、俱發菩提、共修福業、使當今現在爰及來世、永作善因、同登妙果。宜請沙門三十人、諳解法相、兼堪宣導者、各將侍者二人、并散官各一人、薰陸香一百二十斤、馬五匹、分道送舍利、往前件諸州起塔。其未注寺者、就有山水寺所起塔依前山。舊無寺者、於當州內、清靜寺處、建立其塔。所司造樣、送往當州。僧多者三百六十人、其次二百四十人、其次一百二十人、若僧少者盡見僧、爲朕皇后太子廣諸王子孫等、及內外官人一切民庶幽顯生靈、各七日行道并懺悔。起行道日打利。莫問同州異州、任人布施、錢限止十文已下、不得過十文。所施之錢、以供營塔。若少不充、役正丁及用庫物。率土諸州僧尼、普爲舍利設齋。限十月十五日午時、同下入石函。總管刺史已下、縣尉已上、息軍機停常務七日、專檢校行道及打利等事、務盡誠敬、副朕意焉。主者施行。仁壽元年六月十三日、內史令豫章王臣陳宣。（『大正』卷52、213頁b3～24）

門下。仰ぎ惟みるに、正覺は大慈大悲にして、群生を救護し、庶品に津梁たり。朕は、三寶に歸依し、重ねて聖教を興す。四海の内一切人民と、俱に菩提を發し、共に福業を修め、當今現在と爰に來世に及ぶまで、永く善因を作し、同じく妙果に登らしめんと思う。宜しく沙門三十人、法相を諳解し、兼ねて宣導に堪うる者を請じ、各侍者二人、並びに散官各一人、薰陸香一百二十斤、馬五匹を將て、分道して舍利を送り、前件の諸州に往きて塔を起こすべし。其れ未だ寺を注さざるは、山水有る寺所に就き塔を起こすこと前山に依れ。舊に寺無くば、當州の内、清靜なる寺處において、其の塔を建立せよ。所司は樣を造り、送りて當州に往け。僧の多きは三百六十人、其の次は二百四十人、其の次は一百二十人、若し僧の少ければ見僧を盡くし、朕皇后太子廣諸王子孫等、及び内外官人一切民庶幽顯生靈の爲に、各七日行道し並びに懺悔せよ。行道を起こす日に打利せよ。同州異州を問うこと莫く、人の布施するに任すも、錢は限りて十文已下に止め、十文を過ぐるを得ざれ。施す所の錢は、以て塔を供營せよ。若し少くして充たずば、正丁を役し及び庫物を用いよ。率土諸州の僧尼、普く舍利の爲に齋を設けよ。十月十五日午時を限りて、同じく下し

11) 小杉一雄「六朝時代佛塔に於ける舍利安置」（『中國佛教美術史の研究』所收、新樹社、1980年、初出1934年）。

ベトナムバクニン省出土仁壽舍利塔銘，及びその石函について

て石函に入れよ。總管刺史已下，縣尉已上，軍機を息め常務を停むること七日，専ら行道及び打利等の事を檢校し，務めて誠敬を盡し，朕の意に副え。主者施行せよ。

仁壽元年六月十三日，內史令豫章王臣暕宣す。

上によれば，舍利は，全國同日同刻に石函に安置されて地中に埋納されたという（波線部）。この石函について長岡龍作氏は，石函の大小，石函に刻まれたモチーフ・形體もまた畫一的であったと推定し，仁壽四年の舍利塔建立事業で作成されたことが明らかな宜州神徳寺の石函をもって，仁壽舍利塔の石函の基準とすべきことを提言した<sup>12)</sup>。

宜州神徳寺の石函は，身と蓋からなり，身は高さ 119 cm，幅と奥行きは 103 cm，蓋の高さは 52 cm ある。身内部の上縁には，深さ 10 cm，幅・奥行きが 52.5 cm のくぼみがあり，舍利塔銘はここにはめ込まれた<sup>13)</sup>。蓋には「大隋皇/帝舍利/寶塔銘」と記され，四周には四神が表される。蓋の立ち上がり部分の四面には，兩側から飛來する天人が二體ずつ描かれる。石函本體には，**南面**：中央は蓮華座の上に舍利容器，左右に獅子 2・慟哭する金剛力士 2，力士の後方に樹木 2（沙羅雙樹），最前景に水波（跋堤河），**東面**：中央は蓮華座の上に舍利容器，左に東方提頭賴咤天王，右に南方毘婁勒叉天王，**西面**：中央は蓮華座の上に舍利容器，左に西方毘婁得叉天王，右に北方毘沙門天王，**北面**：中央は高臺狀の器物の上に寶珠，左に舍利弗・阿難，右に大迦葉・大目犍連（それぞれ釋迦の死に伴う悲しみを表現する），四人の背後に樹木 2（沙羅雙樹），最前景に水波（跋堤河）が描かれる<sup>14)</sup>。

長岡氏によれば，石函に表された悲しみのモチーフは，舍利埋納儀式に参加して石函を目にした人々に，釋迦の死が現實のものであると觀念させるのと同時に，その供養が差し迫った責務であることを知らせるものであったという。さらに長岡氏は，宜州神徳寺の石函を基準にするという立場から，仁壽舍利塔建立時に作成されたと考えられてきた涇州大雲寺舍利塔の石函（仁壽元年）<sup>15)</sup>と雍州仙遊寺舍利塔の石函（仁壽元

12) 長岡龍作「隋唐期の舍利容器——かたちの變容と意味をめぐって——」（『佛像莊嚴にあらわれる墓モチーフに関する調査研究』所收，平成 14 年（2002）年度～平成 16 年（2004）年度科學研究費補助金，基盤研究（C）（2）研究成果報告書，研究代表者長岡龍作，2005 年，初出 2004 年）。

13) 宜州神徳寺石函の基礎情報に關しては，朱捷元・秦波「陝西長安和耀縣發見的波斯薩珊朝銀幣」（『考古』1974 年 2 期）を參照した。

14) 宜州神徳寺石函の圖様に關しては，長岡注 12) 論文，5～6 頁を參照した。

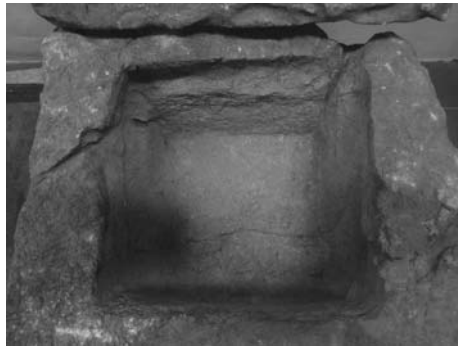
15) 涇州大雲寺の石函は，覆斗式の蓋を持ち，高さは 28.3 cm，正面背面の幅は 50.5 cm，左右の奥行は 49.5 cm である。蓋の上面中央は正方形に區切られ，「大周涇州/大雲寺舍/利之函摠/一十四粒」と刻まれる。身の四面には舍利安置の經緯とそれに關與した人物名が列記される。甘肅省文物工作隊は，涇州大雲寺は仁壽元年に舍利塔が建立された大興國寺を武周代に改稱したものであり，本石函は仁壽元年に造作されたものであるとして，上面・側面



年)<sup>16)</sup> について、宜州神德寺石函とモチーフ・大小の異なる兩石函は、兩塔の舍利が武周代と唐代に再安置された折に作成されたものと推斷する<sup>17)</sup>。

ここで、交州禪衆寺の石函の特徴を確認しておく。石函は、神德寺石函と同じく身と蓋からなる。舍利塔銘・蓋は青みがかった石を用いているのに對し、石函・蓋は白色に近い石を用いており、經年による劣化も甚だしい。詳細は不明であるが、石函・蓋と舍利塔銘・蓋の石質は明らかに異なっている。函の身は幅と奥行きは 45 cm×46 cm、高さは 31 cm、蓋は同サイズで厚さは 8 cm である。身の内部は深さ 20 cm、幅と奥行きは 26 cm×27.5 cm で、上縁内部に舍利塔銘を収めるくぼみなどはない（寫眞 3）。身の外面はひどく劣化しており、圖様の痕跡は確認できなかった（寫眞 4）<sup>18)</sup>。

涇州大雲寺舍利塔や雍州仙遊寺舍利塔は、前者は武周朝に、後者は玄宗朝に舍利が再



寫眞 3（石函内部）



寫眞 4（石函前面）

↓  
四周の圖様は武周代に追刻されたものとみる（甘肅省文物工作隊「甘肅省涇川縣出土の唐代舍利石函」『文物』1966 年第 3 期）。銘文は、藏中進「則天文字資料四題——涇州大雲寺石函銘その他について——」（『神戸外大論叢』39-6, 1988 年）に翻刻される。

- 16) 雍州仙遊寺の石函は、1998 年の仙遊寺移轉に伴う調査時に出土した。石函と共に、仁壽元年の「舍利塔下銘」と開元一三年（725）の「仙遊寺舍利塔銘」が発見されている。前者からは、仁壽元年に仙遊寺に舍利塔が建立されたこと、後者からは、開元年間に新舍利が感得され、新舍利の安置と再莊嚴が行われたことが判明する。石函は、蓋を含めた高さが 40.5 cm、幅・奥行きが 58 cm、身内部の深さは 14.5 cm、幅・奥行きは 31.5 cm である（劉呆運「仙遊寺法王塔的天宮地宮與舍利子」『收藏家』2000 年第 7 期）。石函には、推定南面：向かい合う二菩薩、推定東面：植物を中心に、左に笙を、右に横笛を吹く菩薩、推定北面：踊る菩薩を中心に、左に箏を、右に琵琶を弾く菩薩、推定西面：踊る菩薩を中心に、左に豎笛、右に排簫を吹く菩薩が描かれる（長岡注 12）論文，12 頁）。
- 17) 長岡注 12）論文。
- 18) 石函の身は、蓋と比較して劣化が著しい。これは、蓋が発見者である Nguyễn 氏の自宅に保管されていたのに對し、石函の身は寺院の庭で雨曝しにされていたためであり、Nguyễn 氏によれば発見時には兩者の状態に大きな差異はなかったという。



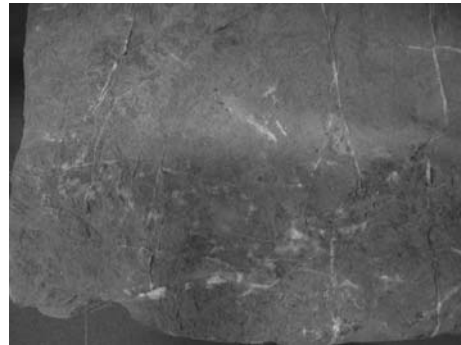
ベトナムバクニン省出土仁壽舍利塔銘，及びその石函について

安置されており，そのため，兩塔から發見された石函には後代に作成された可能性が否定できない。對する交州禪衆寺舍利塔では，舍利が再安置されたことを示す史料・遺物は發見されていない。よってこの石函は，仁壽元年，舍利塔が建立される折に作成されたとみるのが現時点では穩當であろう。

交州禪衆寺舍利石函が仁壽年間のものであるとするならば，宜州神德寺舍利石函を仁壽舍利塔建立時における石函の基準とする長岡氏の議論には疑問が生じることとなろう。この点については，節を改めて検討する。

### 3 石板について

石板は，舍利塔銘・石函を上に乗せた状態で發見された後，石函と共に寺院で保管された。長方形をなし，幅は 65 cm，長さは 100 cm，厚さは 25 cm である。石質は，石函・蓋よりも白色に近く，一部に結晶質が確認できる（寫眞 5）。



寫眞 5（石板）

石板の用途を推測する際に参照したいのが，宜州神德寺舍利塔では石函を安置するための空間が磚によって設けられており，しかも，石函の四周が長方形の石によって圍まれていたということである<sup>19)</sup>。また，「隋西京日嚴道場釋明舜傳」『續高僧傳』卷 11 には，

又深一丈獲方石一段。縱廣徑丈，五采如錦，楞側戛然，如人所造。即以石函置上，而架塔焉。（『大正』卷 50，511 頁 a23～25）

又た深さ一丈に方石一段を獲。縱廣丈に徑り，五采は錦の如く，楞側は戛然として，人の造る所の如し。即ち石函を以て上に置き，しかして塔を架く。

と，仁壽四年，京師の日嚴道場で塔基を掘っていたところ，地中から美しい方石が發見されたためその上に石函を安置したとある<sup>20)</sup>。神德寺石函や上掲史料から類推して，バクニン省で發見された石板は，石函安置のために使用されたものであった可能性が大きい<sup>21)</sup>。

19) 注 13) 朱捷元・秦波論文，127 頁。

20) 史料の所在は，注 11) 小杉論文，44 頁。

21) 『續高僧傳』卷 30 「隋杭州靈隱山天竺寺釋眞觀傳」によれば，仁壽二年，杭州天竺寺では，

ただし交州禪衆寺の場合、一連の出土物の発見された地点が、隋代に舍利塔が建立された場所と一致するかは不明である。たとえそうであったとしても、これらは粘土採取中に発見され、発見後の8年間も粘土の採取は継続して行われた。発見地が現在は池となっていることもあり（写真6）、周囲の状況は発見当時の姿を留めていない。ゆえに、交州禪衆寺舍利塔の地中に、石函安置の空間などが設けられていたかは確認不可能である<sup>22)</sup>。



写真6（出土地の現在の景観）

## 第二節 文獻史料にみえる石函

前節第2項で考察したように、交州禪衆寺の石函と宜州神徳寺の石函とは、大きさ・文様の有無・形状において異なっている。よって、交州禪衆寺の石函が仁壽元年當時のものであるならば、宜州神徳寺の石函を基準にすべきとする長岡氏の提言には再検討の餘地が生じることとなる。ここで注目したいのが、文獻史料に登場する石函の形状である。「舍利感應記」や『續高僧傳』など文獻史料には、仁壽年間に作成された石函の形態などについて多くの記述が残されている。それら史料に基づく限り、石函は、必ずしも畫一的に作成されてはいなかったようである。

そこで以下では、佛教史書中から石函に関する情報を収集し、仁壽元年・仁壽二年・仁壽四年に分けて検討を加える。紙幅の関係上、諸史料で内容が一致する場合は詳細な情報を含む方を、記述に異なる情報が含まれる場合は全ての史料を併記した。

### 1 仁壽元年の石函

仁壽元年には30州に舍利塔が建立された<sup>23)</sup>。30州それぞれで作成された石函のうち、最も詳細な記述が史料に残されているのは岐州鳳泉寺の石函である。「舍利感應記」には、

「方函」に似た石窟が地中から現れたのでそこに石函を埋納したという（『大正』巻50, 702頁c3～7）。史料は、「舍利感應記」『大正』巻52, 219頁c12にもある。

22) Nguyễn氏によれば、遺物の発見時、周囲から磚などは発見されなかったという。

23) 「舍利感應記」『大正』巻52, 213頁c14～15。

ベトナムバクニン省出土仁壽舍利塔銘，及びその石函について

將造函，寺東北二十里，A 忽見文石四段。光潤如玉，小大平整，因取之以作 B 重函。於是大函南壁，異色分炳，爲雙樹之形。C 高三尺三寸，莖如雪白，葉如瑪瑙。北壁東壁，有鳥獸龍象之狀。四壁皆有華形，左旋右轉<sup>24)</sup>。〔『大正』卷 52，214 頁 b 23～28〕

將に函を造らんとするに，寺の東北二十里に，A 忽ち文石四段見る。光潤なること玉の如く，小大平整なれば，因りて之れを取り以て B 重函 を作る。是において大函の南壁，異色分炳し，雙樹の形を爲す。C 高さ三尺三寸，莖は雪白の如く，葉は瑪瑙の如し。北壁東壁には，鳥獸龍象の狀有り。四壁皆華形有りて，左旋右轉す。

とあり，四つの石によって構成された（傍線部 A），重層構造をもつものであったことがわかる（傍線部 B）。玉の如く滑らかで，平らかに整った石を函として成形するや，「大函」外側南面には沙羅雙樹，北面東面には鳥獸龍象，四面には左旋右轉する華形紋様が現れたという<sup>25)</sup>。また傍線部 C には，石函南面に現れた沙羅雙樹はその高さが三尺三寸であったとあるから，「大函」の身の高さは 1 m を超えていたはずである。

この他，仁壽元年に建立された舍利塔のうちで，石函についての記載があるものは以下のとおりである。

#### ①涇州大興國寺

將造函，A 三家，各獻 B 舊磨好石。非界內所有。因而用之，恰然相稱。〔『舍利感應記』『大正』卷 52，214 頁 c 5～6〕<sup>26)</sup>

將に函を造らんとするに，A 三家，各 B 舊磨の好石 を獻ず。界内の所有に非ず。因りて之れを用うるに，恰然として相い稱う。

24) 『集神州三寶感通錄』『大正』卷 52，411 頁 c 23～24 もほぼ同文。

25) 二重構造を持つ隋代の石函には，山東平陰出土のものが知られる。内函は一つの石から成型されており，通高 97 cm，幅・奥行きは 83 cm である。文様はない。内部の空洞上部は幅・奥行 37 cm，深さは 30 cm である。内函の蓋は蓋頂形式であり，身の内部には碑銘を置くためのくぼみが設けられている。外函の四周はほぞを持つ四つの石で成形されたり，下に基石を設け，蓋を伴う。通高は 135 cm，蓋の厚さは 20 cm，幅・奥行きは 117 cm の正方形を成している。外函の蓋もまた蓋頂形式で中央には「大隋皇帝/舍利寶塔」との銘文がある（邱玉鼎・楊書傑「山東平陰發現大隋皇帝舍利寶塔石函」『考古』1986 年第 4 期）。『廣弘明集』のいう岐州鳳泉寺の重函も，外函の形成方法は異なるであろうが，舍利を収める内函を外函が保護するというものであったのだろう。ちなみに，神德寺の舍利石函にも蓋上部に「大隋皇/帝舍利/寶塔銘」と刻まれていたことを考慮するに，山東平陰出土の石函は仁壽舍利塔建立に関わるものであった可能性が大きい（長谷川道隆「北魏・隋代の佛塔基壇と佛舍利奉安の様相——インドのストゥーパを導入して——」『西山禪林學報』25，1998 年，109 頁）。

26) 『集神州三寶感通錄』卷 1，『大正』卷 52，411 頁 c 25～26 にも史料あり。

②亳州開寂寺

界内無石，舍利至，A 便於三處各得一 B 成磨方石。一似函而無底。乃合而用之，不須改鑿。（同右，215 頁 b 20～22）

界内に石無きも，舎利の至るや，A 便ち三處に各一の B 成磨の方石を得。一は函に似て底無し。乃ち合せて之れを用うるに，改鑿を須いず。

將欲起塔，先造石函，地非山郷，周訪難得。良曰，「待覓得石，期至匹成。但發勝心，何緣不濟」。乃要心祈請，願賜哀給。A 忽於州境，獲石三枚。底廂及蓋，各是異縣，運來合之，宛是一物。（『隋京師真寂寺釋曇良傳』『續高僧傳』卷 26，『大正』卷 50，676 頁 b 1～b 5）<sup>27)</sup>

將に塔を起こさんと欲し，先ず石函を造らんとするも，地は山郷に非ざれば，周ねく訪ぬるも得難し。良曰く，「石を覓得するを待たば，期至るも匹り成らんか。但だ勝心を發さば，何ぞ緣に濟らざらん」と。乃ち心を要せて祈請し，哀給を賜らんことを願う。A 忽ち州境に，石三枚を獲。底廂及び蓋は，各是れ縣を異にするも，運來して之れを合わせば，宛も是れ一物のごとし。

③青州勝福寺

初置基日，疏山鑿地，入土三尺，獲古石函。C 長可八尺，深六尺許，B 表裏平滑，殆非人運。（『隋京師轉輪寺釋智能傳』同右，676 頁 a 19～21）<sup>28)</sup>

初め基を置くの日，山を疏み地を鑿るに，土に入ること三尺にして，古き石函を獲。C 長さ可ば八尺，深さ六尺許り，B 表裏平滑にして，殆ど人運に非ず。

傍線部 A によれば，①は三つ，②も三つの石——曇良傳によれば，石はそれぞれ底・廂・蓋に充てられた——を用いて函を成したようである。③は地中から發見した石函をそのまま用いたものであるが，いずれも重層構造をとったようにはみえない。①②③の傍線部 B には，石は發見された時點で既に研磨した状態であったとある。石函のサイズが推定可能なのは③のみで，長さは 8 尺，深さは 6 尺であったと記される（傍線部 C）。青州勝福寺の石函は現在までその存在が確認されていないものの，もしも智能傳が青州勝福寺の石函の大小について實際を反映していたとすれば，青州勝福寺の石函は現在まで知られているどの隋代舍利石函よりも大きかったこととなる<sup>29)</sup>。他州で發見された舍利

27) 同右 412 頁 a 16～17 にも史料あり。

28) 同右 412 頁 a 22，「舍利感應記」『大正』卷 52，215 頁 c 12～13 にも史料あり。

29) 隋代の舍利石函には，宜州神德寺・交州禪衆寺のものを除けば，河北省正定縣出土石函（身と蓋で 43 cm，幅・奥行き 52 cm：大業元年），河北省定縣出土石函（全高 64 cm，幅・奥行き 92 cm：大業二年），房山雲居寺出土石函（通高 24 cm，幅・奥行き 30 cm：大業二年），山東省平陰出土石函（内函の通高は 97 cm，幅・奥行き 83 cm：年不明）が知られ

ベトナムバクニン省出土仁壽舍利塔銘，及びその石函について

塔銘が多くは 50 cm 四方前後であるのに對し，青州勝福寺舍利塔銘が 83 cm 四方であるのも<sup>30)</sup>，あるいは青州勝福寺の石函が他州の石函より大きかったことが影響しているのかもしれない。

以上を総合するに，仁壽元年の石函については，いくつ石を用いるのか，どのような大きさにするのか，重層構造にするのか單層構造にするのかといった點は，諸州の裁量に任されていたようである。そこに圖様を刻むということが畫一的に行われていたのかは，史料からは判然としない。

『續高僧傳』卷 18「隋西京禪定道場釋曇遷傳」には，岐州鳳泉寺の石函について，「以事上聞，帝大悅（事を以て上聞するに，帝大いに悦ぶ）」（『大正』卷 50，573 頁 c 10）と，文帝が瑞祥を聞き大いに喜んだとある。岐州で創作された瑞祥は，建立事業における文帝の意圖に適うものであった。このような雰圍氣を受けたものか，仁壽二年以降には，石函に何らかの圖様が「變出」したという報告が各地から奏上されるようになる。

- る。参考文献はそれぞれ，趙永平・王蘭慶・陳銀風「河北省正定縣出土隋代舍利石函」（『文物』1995 年第 3 期），定縣博物館「河北定縣發現兩座宋代塔基」（『文物』1972 年，第 8 期），北京市文物研究所編『北京考古四十年』（北京燕山出版社，1990 年）並びに雲居寺文物管理處『雲居寺貞石錄』（北京燕山出版社，2008 年），注 25）前掲邱玉鼎・楊書傑論文。
- 30) 現在知られている舍利塔銘の實物，乃至拓片のサイズは以下の通り。

寺名	建立年	サイズ（縦×横 cm）	出典
岐州鳳泉寺	仁壽元年	63.5×63.5	羅西章「鳳泉寺隋舍利塔下銘」（『考古與文物』1985 年第 4 期）
雍州仙遊寺	仁壽元年	50×50	劉呆運注 16）前掲「仙遊寺法王唐的天宮地宮與舍利子」
同州大興國寺	仁壽元年	50.5×50.5	餘華青・張廷皓主編『陝西碑石精華』（三秦出版社，2006 年）
青州勝福寺	仁壽元年	83×83	馬洪剛主編『青州市博物館藏珍 綜合卷』（海天出版社，2006 年）
大興縣龍池寺	仁壽元年	35×30（拓片）	徐自強主編『北京圖書館藏中國歷代石刻拓本匯編 隋唐五代十國 一』（中州古籍出版社出版，1989 年）
交州禪衆寺	仁壽元年	45×46	
信州金輪寺	仁壽二年	44×40	國家文物局主編『中國文物地圖集 重慶分冊 下』（文物出版社，2010 年）
潞州梵堺寺	仁壽二年	1 尺 5 寸 3 分四方（拓片）	『山右石刻叢編』
鄧州大興國寺	仁壽二年	徑 58（拓片）	『北京圖書館藏中國歷代石刻拓本匯編』
梓州華林寺	仁壽四年	51×47（拓片）	中村注 5）前掲「舍利塔銘に關する一考察」
宣州神德寺	仁壽四年	51.5×51.5	注 13）前掲「陝西長安和耀縣發見的波斯珊朝銀幣」
廉州花成寺	仁壽四年	40×40（拓片）	『北京圖書館藏中國歷代石刻拓本匯編』
（京城延興寺）	仁壽元年	32×32	張鴻傑主編『咸陽碑石』（三秦出版社，1990 年）

\*注 3）前掲 Pham 氏論文所載の表を一部加筆・修正した。

## 2 仁壽二年の石函

仁壽二年には、「舍利感應記」によれば 51 州に舍利塔が建立された<sup>31)</sup>。史料を列挙しておこう。

### ①兗州普樂寺

初營外函，C 得一青石。錯磨始了，將欲鑿飾，A 變成馬瑙。五色相雜，文彩分明。

(「隋京師勝光寺釋法性傳」『續高僧傳』卷 26, 『大正』卷 50, 675 頁 a 14~16)<sup>32)</sup>

初め外函を營むに，C 一青石を得。錯磨始く了り，將に鑿飾せんと欲するに，A 變じて馬瑙と成る。五色相雜りて，文彩は分明なり。

### ②鄧州大興國寺

四月六日 A 石函變，作玉及瑪瑙。B 其石有文，現「正國德」三字。并有仙人驎鳳等出。(「舍利感應記」『大正』卷 52, 218 頁 b 1~3)

四月六日に A 石函變じ，玉及び瑪瑙と作る。B 其の石に文有り，「正國德」の三字現る。並びに仙人驎鳳等の出づる有り。

既至求石，訪無美者，乃取寺内璞石，鑄斲爲函。A 石本龜惡，磨飾將了，乃變成馬瑙，細膩異倫。B 復有隸字三枚，云「正國得」也。形設正直，巧類神工，名筆之人，未可加點。又見種種林木，麟鳳等像。(「隋西京淨影道場釋寶儒傳」『續高僧傳』卷 10, 『大正』卷 50, 507 頁 a 27~b 3)

既に至りて石を求め，訪ぬるも美なる無ければ，乃ち寺内の璞石を取り，鑄斲して函と爲す。A 石は本龜惡なるも，磨飾將に了らんとするに，乃ち變じて馬瑙と成り，細膩なること倫を異にす。B 復た隸字三枚有り，「正國得」と云うなり。形設は正直にして，巧は神工に類し，名筆の人も，未だ加點するべからず。又た種種の林木，麟鳳等の像見る。

### ③毛州護法寺

A 其函忽變，爲青琉璃，内外通徹。人以白綾，周匝數重，漫覆其函。又加輒疊灰泥其上，尋照其泥，還如函色。又灰泥上畫作十花，飾以金薄。及成就後，唯一金色，餘花皆采。(「隋京師大興善寺釋僧昕傳」『續高僧傳』卷 26, 『大正』卷 50, 673 頁 b 14~18)<sup>33)</sup>

A 其の函忽ち變じ，青き琉璃と爲り，内外通徹す。人の白綾を以て，周匝すること數重にして，漫く其の函を覆う。又た輒を加え灰泥を其の上に疊ね，尋いで其の泥

31) 「仁壽二年正月二十三日，復分布五十一州建立靈塔」(「舍利感應記」『大正』卷 52, 217 頁 a 25~26)。

32) 「舍利感應記」『大正』卷 52, 217 頁 c 26~28 にも史料あり。

33) 「舍利感應記」『大正』卷 52, 218 頁 c 22~25 にも史料あり。



ベトナムバクニン省出土仁壽舍利塔銘，及びその石函について

を照らすに、還りて函の色の如し。又た灰泥の上に十花を畫き作り、飾るに金薄を以てす。成就に及ぶの後は、唯だ一は金色にして、餘花は皆采なり。

④幽州弘業寺

A 石函始磨，兩面以水洗之，明如水鏡，內外相通，紫光焰起。其石班駁，又類碼瑙，潤澤玆耀，光似瑠璃。（中略）至八日，舍利入函。B 自旦及辰，函石，現文髣像。有菩薩光彩粉藻，又似衆仙。其間，鳥獸林木諸狀，不常者衆。實難詳審。（「舍利感應記」『大正』卷 52，219 頁 b 12～19）<sup>34)</sup>

A 石函の始めて磨くに，兩面水を以て之れを洗えば，明かなること水鏡の如く，内外相い通じ，紫光の焰起こる。其の石は班駁にして，又た碼瑙に類し，潤澤玆耀にして，光ること瑠璃に似る。（中略）八日に至り，舍利を函に入る。B 旦より辰に及ぶまで，函石，文の像に髣る現る。菩薩の光彩粉藻する有りて，又た衆仙に似る。其の間，鳥獸林木の諸狀，常ならざる者衆し。實に詳審し難し。

⑤陝州大興國寺

未發之間，司馬張備，共嶠縣令鄭乾意，閿鄉縣丞趙懷坦，大都督侯進，當作人民侯謙等，至舍利塔，基内石函所檢校，B 同見函外東面石文亂起。其張備等，怪異更向北面。虔意以衫袖拂拭，隨手向上，即見娑羅樹一雙，東西相對，枝葉宛具，作深青色。俄頃，道俗奔集。復於西面外，以水澆洗，即見兩樹葉有五色。次南面外，復有兩樹，枝條稍直，其葉色黃白。次東面外，復有兩樹，色青葉長。其四面樹下，竝有水文。於此，兩樹之間，使人文林郎韋範，初見一鳥仰臥。司馬張備，次後看時，其鳥已立。鳥前有金華三枝。鳥形大小毛色，與前掘地得者不異。其鳥，須臾向西南行，至佛下停住。函内西南近角，復有一菩薩，坐華臺上面向東。有一立尼，面向菩薩合掌。相去二寸。西面内，復有二菩薩竝立。一金色面向南，一銀色面向北。相去可有三寸。西脣上有一臥佛，側身頭向北面向西。其三菩薩，於石函内，竝放紅紫光，高一尺許。（同右，220 頁 b 25～c 15）<sup>35)</sup>

未だ發さざるの間，司馬張備，嶠縣の令鄭乾意，閿鄉縣の丞趙懷坦，大都督侯進，當作の人民侯謙等と共に，舍利塔に至り，基内の石函を檢校する所，B 同じく函外の東面の石に文の亂起するを見る。其れ張備等，怪異して更に北面に向かう。虔意して衫袖を以て拂拭し，手に隨いて向上するに，即ち娑羅樹一雙，東西相い對して，枝葉宛具し，深き青色を作すを見る。俄頃にして，道俗奔り集まる。復た西面の外に，水を以て澆ぎ洗うに，即ち兩樹の葉の五色有るを見る。次いで南面の外，復た

34) 「隋京師仁覺寺釋寶藏傳」『續高僧傳』卷 26，『大正』卷 50，674 頁 b 23～26 にも史料あり。

35) 「隋京師勝光寺釋法朗傳」同右，672 頁 b 11～20 にも史料あり。

兩樹有り、枝條は稍直にして、其の葉色は黃白なり。次いで東面の外、復た兩樹有り、色は青く葉は長し。其れ四面の樹下に、竝びに水文有り。此において、兩樹の間に、使人文林郎韋範、初めて一鳥の仰臥するを見る。司馬張備、次いで後に看る時、其の鳥已に立つ。鳥の前に金華三枝有り。鳥の形大小毛色、前に地を掘りて得たる者と異ならず。其の鳥、須臾にして西南に向かいて行き、佛の下に至りて停住す。函内の西南の角に近きに、復た一菩薩有り、華臺の上に坐し面を東に向く。一立尼有り、面を菩薩に向けて合掌す。相い去ること二寸なり。西面の内、復た二菩薩の竝び立つ有り。一は金色にして面を南に向け、一は銀色にして面を北に向く。相い去ること三寸有るべし。西脣の上に一臥佛有り、側身して頭を北に向け面を西に向く。其れ三菩薩は、石函の内において、竝びに紅紫の光を放つこと、高さ一尺許りなり。

⑥宣州永安寺

又令掘倉光之處、果得石函。恰同棺樣、不須繕造、因藏舍利。（『唐京師大興善寺釋法侃傳』『續高僧傳』卷11,『大正』卷50, 513頁b19~21）

又た倉光の處を掘らしむるに、果たして石函を得。恰も棺樣に同じく、繕造を須いず、因りて舍利を藏む。

⑦營州梵幢寺

舊有石龜形狀極大。欲作函用、引致極難。（中略）安自思念、「石大函小、何由卒成」。懼日愆期、内懷憂灼。比曉看之、C 其石稱函、自然分析、不勞鐫琢、宛爾成就。（『隋京師淨影寺釋寶安傳』『續高僧傳』卷26,『大正』卷50, 674頁b5~9）<sup>36)</sup>

舊に石の龜形にして狀の極めて大なる有り。函を作すに用いんと欲するも、引致すること極めて難し。（中略）安自ら思念するに、「石は大にして函は小なれば、何に由りてか卒かに成らん」と。日の期を愆るを懼れ、内に憂灼を懷う。曉に比びて之れを看るに、C 其の石函に稱いて、自然に分析し、鐫琢を勞せずして、宛爾として成就す。

①②③④には成形にあたって石質が美しく變じたという記載が共通する（傍線部A）。文字・圖樣が「變出」したとあるのは②④⑤であり（傍線部B）、②④には仙人のモチーフが共通する（太字）<sup>37)</sup>。

①には「錯磨」の後に「鑿飾」しようとしたとあるから（波線部）、研磨の後に何らか

36) 「舍利感應記」『大正』卷52, 219頁c10~11にも史料あり。

37) 舍利塔建立事業と神仙思想との關連については、長岡龍作「佛教における『靈驗』——佛が感應する場と表象——」（『死生學研究』12, 2009年）14~17頁。

ベトナムバクニン省出土仁壽舍利塔銘，及びその石函について

の装飾を施すことは実際に行われていたらしい。とはいえ③には、函が完成した後、白綾で石函を幾重にも覆い、その上に甎と灰泥を加えて花の圖様を施し、さらに金箔などによってそれを彩ったとある（波線部）。石函に關わる装飾は、石函を保護するように設けられた甎と灰泥の上に加えられることもあった。

石函の形状が判明するのは⑥のみである。⑥では、舍利塔建立豫定地から棺型の石函が発見されたため、そのまま舍利安置に用いたという<sup>38)</sup>。①には「一青石」から函を作ったとあり、⑦には龜型の巨石を割って石函を作ったとあるから（傍線部C）、兩石函は、いくつかのパーツを組み合わせて成形したというよりは（仁壽元年の亳州開寂寺の石函などはこのタイプ）、一つの石を削り抜いて成形したものであったと推測しておく。

### 3 仁壽四年の石函

仁壽四年には30餘州に舍利塔が建立された<sup>39)</sup>。石函に關する情報を抽出できる史料は以下の三つしか発見できていない。

#### ① 浙州法相寺

初營石函，本惟青色。A 及磨治了，變爲鮮錦，布彩鋪發。B 又見僧形，但有半身。及曉往觀，僧變爲佛，光焰神儀，都皆明著。B 又現三字，云「人王子」也。（『隋京師大興善寺釋僧蓋傳』『續高僧傳』卷26，『大正』卷50，670頁a7～11）

初め石函を營むに，本は惟だ青色なるのみ。A 磨治し了るに及びて，變じて鮮錦と爲り，布彩鋪發す。B 又た僧形，但だ半身有る見る。曉に及びて往きて觀るに，僧の變じて佛と爲り，光焰は神儀にして，都て皆明らかに著る。B 又た三字現れ，「人王子」と云うなり。

#### ② 復州方樂寺

又覓石造函，遍求不獲。乃於竟陵縣界，感得一石。A 磨治既了，忽變爲玉，五色光潤，內徹照見旁人。B 又於石中，現衆色象。（『隋東都上林園翻經館沙門釋彥琮傳』『續高僧傳』卷2，『大正』卷50，437頁b16～18）

又た石を覓めて函を造らんとし，遍ねく求むれども獲ず。乃ち竟陵縣の界に，一石を感得す。A 磨治既に了れば，忽ち變じて玉と爲り，五色光潤として，内より徹じて旁人を照見す。B 又た石中に，衆色の象現る。

38) 史料の所在は，小杉注11)論文，69頁。

39) 「隋西京大興善寺釋洪遵傳』『續高僧傳』卷21，『大正』卷50，611頁c20～21。

③遼州下生寺

A 石函變爲錦文, B 及童子之象。函之北面, 現於雙樹下有臥佛。又於函南, 現金剛捉杵擬山之相。又於函東, 現二佛俱立, 并一麒麟。又於函西, 現一菩薩, 并一神尼, 曲身合掌向於菩薩。更有諸相, 略不述之。(『隋西京海覺道場釋法總傳』『續高僧傳』卷 10, 『大正』卷 50, 506 頁 a 1~6)

A 石函變じて錦文を爲し, B 及び童子の象あり。函の北面に, 雙樹の下に臥佛有る現る。又た函の南に, 金剛の杵を捉りて山に擬するの相現る。又た函の東に, 二佛の俱に立つ現れ, 並びに一麒麟あり。又た函の西に, 一菩薩を現し, 並びに一神尼, 身を曲げて合掌し菩薩に向かうあり。更に諸相有るも, 略して之を述べず。

上はいずれも、石函成形後に石質が變じ（傍線部 A）、文字や様々な圖様が現れたとする（傍線部 B）。現出したとされる圖様の中でも、③の菩薩を拜する神尼というモチーフは重要な意味を持つ。これとよく似たモチーフ——菩薩に向かって合掌する尼——は、仁壽二年の⑤陝州大興國寺の石函にもみられた。兩石函に現れたという尼は、幼少期の文帝を養育したという智仙を指す<sup>40)</sup>。

以上、佛教史書に登場する石函について概略をみてきた。交州禪衆寺石函の存在や、ここまで述べてきたことを総合すると、石函の大きさ・形状については、畫一的であることが必ずしも要求されていなかったと考えざるをえない。

最後に、石函に畫一的な圖様は刻まれていたのか否かについて検討しておく<sup>41)</sup>。ここで注目したいのが、文字や圖様が現出したとされる石函のうち、仁壽元年：岐州鳳泉寺石函・仁壽二年：陝州大興國寺石函・仁壽四年：遼州下生寺石函は、圖様が石函壁面に現出したと記されるものの、そのモチーフは宜州神德寺舍利石函と一致しないことである<sup>42)</sup>。石函壁面に現出したとされる圖様と、宜州神德寺舍利石函のモチーフとの不一致

40) 陝州大興國寺の石函に現れた尼が智仙を指すことは、肥田路美「一州一寺制と皇帝等身佛像」(『初唐佛教美術の研究』所収、中央公論美術出版、2011 年、初出 2002, 2009 年) 187 頁。

41) 長岡龍作氏は、特殊な石を得て函にしたという記載や、石函が様々な圖様を出だしたとする記載が「舍利感應記」「慶舍利感應表并答」に残されていることについて、石函には感應を示すことが期待されたのであり、石の素材に強い関心が及んだのも舍利の感應を媒介しやすい石が求められたためであろうとする(『隋仁壽舍利塔と青州勝福寺址』氣賀澤保規編『中國中世佛教石刻の研究』所収、勉誠出版、2013 年、171~174 頁)。

42) 徐州流溝寺舍利石函は、石函が放つ光の中に仙人などが見えたとする瑞祥が、邢州汎愛寺舍利石函は、「函上」に諸佛菩薩像や光明が現れたとする瑞祥が創作された(前者は「隋京師沙門釋辨寂傳」『續高僧傳』卷 26, 『大正』卷 50, 675 頁 b 1~4, 後者は「唐京師大總持寺釋寶襲傳」『續高僧傳』卷 12, 『大正』卷 50, 520 頁 b 7~b 11)。

ベトナムバクニン省出土仁壽舍利塔銘，及びその石函について

については、以下の二つ解釋が可能であろう。

- I 石函には、宜州神徳寺舍利石函と同様の畫一的なモチーフを描くよう定められていたが、それとは異なる圖様が現出するという瑞祥が創作された。
- II 石函には畫一的なモチーフを描くという規定はなかった、またはあったとしても徹底されてはおらず、諸州の判斷により、舍利供養の意義を大衆に示すために種々の圖様が刻まれるほか、研磨された表面に種々の圖様が現出するという瑞祥が創作されることがあった。

石函に描くべき畫一的なモチーフが存在したとすれば、それは塔の「造様」とともに文帝の命によって諸州に頒布されたはずである。つまり、もしも I であったとすれば、敕命によって定められたモチーフがあったにも関わらず、それとは異なる圖様が諸州で瑞祥として現れたこととなる。文帝即位の正當性を佛教的に示すことを目的とする本事業において<sup>43)</sup>、諸州の僧俗の眼前で、敕命とは異なる圖様が瑞祥として現出するというのはいささか奇妙に思われてならない。仁壽舍利石函の出土例が少ない中で結論を出すことは難しいが、交州舍利石函にはいずれの圖様も刻まれていないことを踏まえるに、宜州舍利石函のモチーフと諸州の石函に現出したとされる圖様との差異は、現時点では II によって理解するのが穩當であるように思う。

## お わ り に

本稿第一節では、2004 年にベトナムのバクニン省で發見され、2012 年にその存在が確認された交州禪衆寺の舍利塔銘・舍利石函・石板についてその特徴を簡単に紹介した。出土物の中でも、佛教の地域化という問題と関連して注目したのが石函である。仁壽舍利塔建立に際して作成された石函は、これまでは宜州神徳寺の石函しか知られていなかった。仁壽舍利塔が朝廷から配布された畫一的な「造様」によって建立されたと考えられてきたことから、長岡氏は、舍利石函も同じく畫一的に作成されたのであり、その詳細は宜州神徳寺石函を基準として推定すべきことを提言した。

しかし、交州禪衆寺舍利石函は、大小・圖様の有無・形態において宜州神徳寺の舍利

---

43) 仁壽舍利塔建立事業の全容とその意義に言及した代表的な研究には、上でふれたもの以外に、佐々木功成「仁壽舍利塔考」(『龍谷大學論叢』283, 1928 年)、山崎宏「隋の高祖文帝の佛教治國政策」(『支那中世佛教の展開』清水書店, 1942 年)塚本善隆「國分寺と隋唐の佛教政策ならびに官寺」(『塚本善隆著作集 第六卷 日中佛教交渉史研究』所収、大東出版社, 1974 年、初出 1938 年)、氣賀澤保規「隋仁壽元年(601)の學校削減と舍利供養」(『駿臺史學』111, 2001 年)などがある。

石函と異なっている。そこで第二節では、仁壽舍利石函に関連する史料を佛教史書から収集した。その結果、仁壽舍利石函の大きさや圖様の有無、石函の形状は、畫一的であるよう求められていたとは必ずしもいい切れないという結論に達した<sup>44)</sup>。

加島勝氏によれば、インドやその周邊、また中央アジアでは、地域の葬送儀禮上の慣習や傳統を色濃く反映しながら、その土地で用いられる最も上等な骨藏器を舍利容器に採用した。他方、中國の舍利埋納は、入れ子式の容器を採用した點でインドの影響を受けつつも、最も外側の容器に石函を用い、舍利埋納の由緒を銘に記した點で中國古來の埋葬方法を踏まえたものであったという<sup>45)</sup>。仁壽舍利石函や舍利塔銘のように、舍利を石函に埋納しその意義を銘に刻むということは、佛教が中國という地域に受容される過程で生じた地域化の産物であった。

しかし、仁壽舍利石函の場合、文帝の感得した舍利を埋納するという同一の目的の下、ほぼ同時期に作成されたにもかかわらず、大きさ・圖様の有無・形状には各地で差異が生じていた可能性が大きい。舍利埋納時に生じたとされる瑞祥に、様々な色の光や香氣の發生、天花や甘露の降下といった同一の要素が多く含まれる一方で<sup>46)</sup>、石函に現出したとされる圖様に沙羅雙樹・菩薩・仙人・鳥獸・神尼などの要素が多種多様に含まれていたことは、石函をめぐる多様性がその瑞祥にも及んでいたことを示している。

このような仁壽石函がもつ多様性は、第一に、塔が建立された 100 以上の寺院に存在したであろう佛教信仰上の差異を念頭に置いて考える必要があろう。前掲した「隋京師眞寂寺釋曇良傳」からは、亳州開寂寺の舍利石函は僧侶を中心として作成されたことが窺える。このような場合には、石函の詳細や瑞祥の内容には、作成の中心となる僧侶の佛教理解が影響したことが豫想されてよい。

第二に、寺院を取り巻く政治状況の差異である。例えば、蒲州栖巖寺から多くの瑞祥が言上されたことは、當寺が文帝の父楊忠の建立した寺院であったことと無縁ではない<sup>47)</sup>。蒲州栖巖寺は創建当初から隋帝室と密着に結びついており、そうであるがゆえに、當寺には感應の現出が強く期待されたであろうし、栖巖寺としても積極的に感應を創作したことが豫想される。一方の交州では、石函のみならず、舍利塔に関わるどのような

44) このようにみえてくると、涇州大雲寺石函と雍州仙遊寺石函について、大きさや圖様の内容によって仁壽年間のものであるか否かを判斷することは難しいように思われる。

45) 加島勝「中國・シルクロードにおける舍利容器の形式變遷について」(『シルクロード學研究』21, 2004 年)。

46) これら瑞祥の意味については、肥田路美「舍利信仰と王權」(『死生學研究』11, 2009 年) 11 頁。

47) 「舍利感應記」『大正』卷 52, 214 頁 c 26~215 頁 a21。



瑞祥も史料には残されていない。舍利塔建立前後の交州では、反亂が頻発するなど隋の支配は確立されておらず<sup>48)</sup>、瑞祥を作り出す雰囲気は容易には共有されなかったためであろう。

第三に、第二點と関連して、舍利塔建立資金が諸州の喜捨によって賄われていた、という金銭的な事情を考慮するべきである（第一節前掲、舍利塔建立の詔）。たとえ不足分が官費で補われたとしても（舍利塔建立の詔）、喜捨の多少により生じた建立資金の差異は必ずや存在したはずであり、小杉氏が想定したように地上の舍利塔が畫一的でなければならぬとすれば<sup>49)</sup>、建立資金の差異は通常は目には見えない部分に大きく影響したであろう。宜州神徳寺舍利石函と比較して交州禪衆寺舍利石函が簡素であるのは、安定した支配の築かれていた華北地域と比較して、當時の交州が政治的に不安定であったことが関係しているものと推測される。

仁壽舍利塔建立事業は、阿育王による八萬四千塔の建立を志向しつつ<sup>50)</sup>、「菩薩戒佛弟子皇帝」としての立場から推進されたのであり<sup>51)</sup>、舍利安置の方法に至るまで、隋代における佛教の地域化を象徴するものであったといえる。その一方で、諸州での舍利塔建立事業は、信仰・政治・經濟における地域性を反映しながら展開されていた可能性が大きい。関係史料のみならず、今後増加するであろう舍利石函を分析することで、舍利塔建立時期における佛教の地域性——中國・諸州・諸寺といったレベルにおける——について、その概要を追究することが可能になるであろう。

以上、仁壽舍利塔事業を題材に、隋代における佛教の地域化について新たな情報が得られるものと予測するものであるが、本稿ではその可能性を指摘するに留め、具體的な考察は別の機会に譲ることとしたい。

48) Phạm 注 3) 前掲論文。

49) 小杉注 11) 論文。

50) Chen, Jinhua. *Monks and Monarchs, Kinship and Kingship: Tanqian in Sui Buddhism and Politics*. Kyoto: Italian School of East Asian Studies, 2002, pp. 75-87.

51) 隋帝の受戒については拙稿「隋代佛教の系譜——菩薩戒を中心として——」（『古代アジア世界の對外交渉と佛教』所収、山川出版社、2011年、初出2006年）。

本稿の執筆に当たっては、バクニン省博物館館長の Lê Viêt Nga 氏、発見者である Nguyễn Văn Đức 氏、研究収集室（舍利塔銘・石函発見當時）の Kieu Thi Thom 氏、及び共同研究者である Phạm Lê Huy 氏の全面的な協力を得た。特に記して感謝申し上げたい。

## On the Inscription and the Stone Coffin Unearthed in the Province of Bắc Ninh, Viet Nam

Mayuko KAWAKAMI

In 2004, the oldest inscription of Viet Nam was discovered in the Province of Bắc Ninh. The inscription was unearthed with a lid of its own, an empty coffin, a coffin lid and a stone plank. According to this inscription, the text was inscribed in 601—the first year of Emperor Sui Wen-di's Renshou relic-distribution campaigns—and the coffin and its accessories were made for the Chanzhong Monastery 禪衆寺, located in Rongbian-Xian prefecture 龍編縣 in Jiaozhou 交州 province.

According to a recent research, it was argued that all the Renshou Relic stone coffins, as well as the pagodas, were made in the same way in more than 100 monasteries, and that the stone coffin buried in the Shende Monastery 神德寺 in Yi-Zhou 宜州 could have been the model of other stone coffins. But the one discovered in the Chanzhong Monastery was different from the Shende Monastery model in size, motif and form. Therefore, this paper, in an attempt to test the above theory, gathers and analyses the records on Renshou Relic stone coffins, and comes to a conclusion that a standard for the stone coffins was not given or, if there ever was one, it was not necessarily observed. It should be argued instead that the stone coffins were the product of the localization of Buddhism in China, and their style and form might have depended on how the monks of the area understood Buddhism, together with the political and economical circumstances of each monastery or province in which the pagodas were built.